

あらゆる薬を永夜社が管理する異変世界。全ての病気は永夜社で開発される特効薬で完治し、それ故に企業でありながら絶大的な力を持つ。

モコウは親友であるケイネの病を治してもらうため、嫌々ながら社員として働かされている。

『株(永夜社)』

冒頭、飛び逃げるリグルを追う、モコウ・レイセン。二人は逃げる彼女に対し、弾幕展開し追撃をかけている。

突然の状況にどういふことが考えていたレイムに、飛んできたリグルが「もつ」らしいらない、あなたにやるよー!」と言って手にした紙袋を投げよす。

それを見ていたモコウは、「あなたが薬泥棒の真犯人ってことね。焼き尽くすー!」と言つや否や炎弾を放ってきた。躲しながらレイムが渡された袋を見ると、中には薬が何錠か入っていた。

「成る程……大体分かったわ」と呟くと、レイムは変身。二人に対し身構える。

「ほんとに分かっているのかなあ、レイムさん……」
傍で見ていたアキユウの眩きは無視した。

【Op】

【レイム対モコウ・レイセン】から
狂気を操る幻覚を見せてくるレイセン。更に炎で追撃をかけるモコウ。彼女たちの攻撃を紙一重で回避するや、「新しい力を試すか……!」カードを手にして変身。ミニリアの姿になる。
「変わったー?」

驚愕するモコウに、「こんなにも月が綺麗なんだもの……ね?」と告げて反撃開始。【不夜城レッド】で兎を倒すと、更にFSで【パチュリー】に変身。炎に対し、水のスペルで対抗する。

拮抗した状態。向き合う二人。レイムは決着をつけようとしてミニリアのLASに手をかけるが、そこで矢心エイリンが現れ、停戦を呼びかける。

場所は変わってエイリン、モコウ、レイムの三人は超高層ビルへ。『株(永夜社)』と表記された場所である。

向かう途中、エイリンが説明するに、この会社は世界全ての薬の生産・管理しており、それ故に莫大な利益を得ているそうだ。先ほどのリグルはそこから薬を盗み出したため、モコウ

達戦闘課が追っていたという。

興味なさげに聞いていたレイムは、社長室に通される。そこにいるのは、永夜社の社長である少女、鳳来カグヤだった。

モコウと互角に戦ったレイムの力を買い、カグヤはレイムに派遣社員として働かないか提案する。

最初は面倒だと突っぱねたレイムだったが、前払い金として渡された報酬の額を見て、態度を一変。「まあ……悪くないわね」とそう言って協力を引き受ける。

そしてカグヤは、傍にいたモコウにレイムの世話を命じる。なんで自分が、と反論するモコウだったが、「拒否するならばださないわよ?」と返され渋々了承。

一連のやり取りを見て、レイムはモコウがここで働いていることに疑問を持つ。

会社入り口で待っていたアキユウ、サナエと合流し、レイム一行はモコウ宅まで案内される。そこは大企業でエースとして働いているとは思えない、簡素なアパートだった。

モコウに促され三人が中に入ると、そこには床に伏したケイネがいた。見るからに体調が悪そうな彼女に、モコウはすべ先程カグヤから手渡された薬を飲ませる。

「すまない、モコウ。私のせいで……」と謝るケイネに、モコウはいいから少し寝ろ、と言つと、彼女を横にした。

ダイニングに置かれたテーブルに座り、事情を話すモコウ。ケイネは以前から突然病に冒されてしまい、塾も休校してしまっている状態なのだという。彼女の症状を少しでも緩和させるため、モコウはカグヤの元で働く代わりに、薬を受け取っていたのだ。

しかも彼女の病気は未だに治る兆候が無く、恐らくケイネをこのままにして、自分を働かせ続けるのが狙いだろつと言つ。だが、ただこのまま手をこまねいているつもりはない、とモコウ。永夜社にはあらゆる病気を治す『蓬莱の薬』なるものがある、と言われている。モコウはそれを、何とかして手に入れるつもりなのだ。

事情を聞いたレイムは、アキユウに促されたこともあり、モコウと共に永夜社へ。『蓬莱の薬』を探すため、地下の立ち入り禁止エリアに侵入する。

しかし、そこには既に先客がいた。

「動くと撃つ! ……違った、撃つと動くか」

「魔理沙…なんであんたがっ?」

銃口を向ける霧雨魔理沙。彼女の首には社員証が提げられており、つまり彼女は永夜社の社員としてここにいるというのだ。そして、全てはカグヤとエイリンの計画だった。彼女たちはモコウがいつか裏切ると踏んで、レイムを利用したのだ。

戦力が増えれば、モコウは動へ。ならばその時に、世界の破壊者と言われるレイムごと始末してしまえばいいと。

魔理沙はレイムより先にこの世界に来ていた。その上で『蓬莱の薬』を分けてもらう条件で、カグヤ達に協力したのだ。

真実を聞いたレイムは「あんたがここで捕まるわけにはいかない。私が時間を稼ぐから、さっさと行きなさい」とモコウに逃げるように言い、変身。魔理沙と向き合う。

「悪いが、お前はここで終わりで」

「どうかしらっ。そつとも限らないかも、しれないわよっ」

「たいした自信だな。——じゃあ、今すぐ動かせー！」

で、次回。

『覚醒・不死のヴォルケイン』

戦闘から。地下通路という狭い空間を利用して、レイムは【陰陽玉】を発動。跳ね回る玉を回避すると、魔理沙は「永夜って言ったらいつだぜー！」と言って【プリス】を召喚する。

「就寝前にいきなり呼び出さないでよ……」

「まあそつ言っなって。頼むぜプリス」

しよつがないわね、とプリスはあくびをかみ殺す。そして、人形達を周囲に並べると、言った。

「まあいいでしょう。それに所詮、”こつちの巫女”は三色。

その力は、私の四割二分九厘にも満たないわー！」

飛び交う人形に、レイムは玉串を構える。

【OP ぶれーん、ぶれーん】

会社の入り口で待機していたアキュウとサナエ。そこへ一人で飛び出してきたモコウに疑問を持つが、「失敗した、逃げるわよー！」と言われる。

レイムが時間を稼いでいる、それを聞いたサナエは、アキュウとモコウは先に逃げるように言つと、永夜社へ向け突入した。

再び視点はレイム達へ。レイムはスペルは全て人形達に撃ち落とされ、魔理沙からの銃撃を回避するので精一杯だった。更

に二対一の状況に、思わず舌打ちする。

「私とプリスのコンビには、流石のお前でも厳しいだろっ」

「……ま、確かに厄介な相手ね」

一歩下がるレイム。変身する隙さえなく、絶体絶命のその時だ。

「——吹き荒へ【神ノ風】——！」

声に次いで、通路の中で台風が生まれる。本来なら準備が必要なスペルだが、狭い空間では十分な威力を発揮した。丁度台風の目にいたレイムは、その様に唾然。台風の風が避けるように割れ、そこから現れたサナエに更に呆然。

「逃げますよ、レイムー！」

「……初めてあんたを、凄いと思ったかもしれないわ……」

とやり取りをして、その場から撤退する。

ケイネがいるアパートは、既にカグヤが押さえている筈。連絡をとる手段はない。

どうするかとサナエはレイムに聞くが、モコウは必ずもう一度永夜社に向かう筈。だから、自分たちも回復を待って行動に移ろつと言っ。

「バカね。助けになんか来て、あんたまで捕まったらどうするのよ」

「何言ってるんですか……。友達なんだから、当たり前でしょっ」

笑顔を向けるサナエに安心して、レイムは気絶してしまふ。

逃走し隠れるモコウとアキュウ。どうするかと問うアキュウに、こつになったら意地でも薬を手に入れるとモコウは言っ。

人外の力で妖怪退治を生業としていたため、人からも妖怪からも恐れられ、孤独だったモコウ。そんな中でたった一人、ケイネだけは自分を友人だと言ってくれた。

だから、それに報いたい。彼女の為なら何だってする。

アキュウには安全なところで隠れているよう言っ、モコウは再び永夜社へ向かう。

モコウが現れ、社内は警戒態勢が敷かれる。戦闘課のレイセンも配置に向かおうとするが、そこに魔理沙が立ちふさがった。「裏切るつもりか」と問うレイセン。それに対して「お前らが薬を渡す気がないのは分かってたよ。だったら、あいつらに乗っかって。借りた”方”が、効率がいい。だろっ」と言っ、変身。

魔理沙は全て承知した上で、カグヤ達も騙していたのだ。レイム達が暴れやすい状況に、そして自分が薬を手に入れやすい

状況にするため、彼女はレイムに敵対したフリをしていたのである。

一方モコウは警備の兎達を蹴散らし、地下通路を抜けて研究所へ突入していた。そこには既にカグヤとメイリンが。

二人からの攻撃を受け、モコウは倒れてしまう。カグヤはモコウを足蹴にするが、『蓬莱の薬』の力で語の出した。

薬は万能薬などではなく、不死の秘薬。それを飲めば永遠の命を手に入れることができるのだ。

永遠に自分に隷属すると約束するなら、ケイネは救ってやるとカグヤ。だが、モコウはそれを拒否する。それを聞いてエイリンがトドメを刺そうとしたときだ。レイムが乱入し、『妖怪バスター』を乱射。モコウを救い出す。

邪魔をしなければ、モコウを倒せば『蓬莱の薬』を分けよう、そいつはカグヤだったが、レイムはそんな者は必要ないと銃を向ける。

「例え限りの命でも、友を思い、友の為に自分を犠牲にする。それが生きるってことですよ。……不死の何が素晴らしいのかわらないけどね——死ぬないことは、死ぬのと一緒よ——」

立ち上りの、顔へモコウ。解放される【妹紅】のカード。それを見つめ顔へと、「行くわよ、モコウ」と言いつて戦闘を始める。

モコウはカグヤと、レイムはエイリンと。組み合ったエイリンを引き返すがすと、レイムはモコウの「S」を発動。「ちょっとくすぐったいわよっ」背中を押すと、モコウの背中で炎の翼。そして全身が火の鳥に、モコウ・ヒントリとなってカグヤを地下からビル屋上まで突き上げる。

レイムはエイリンを連れビル前に。手を払いカードを取り出したレイムに、メイリンは「あなた一体何者なの——」

「通のすぐりの解決屋よ。覚えときなさい——」カードを差し込み、LASを発動。【陰陽鬼神王】で撃破。続けてモコウのLASを取り出し発動すると、カグヤを屋上から地上まで連れ立ち、炎と共に叩きつけ撃破する。

社内から特効薬を見つけ出したモコウは、それをケイネに飲ませる。

カグヤとエイリンは病原菌の研究を行い、それを利用して人々を病に冒し、そして自分たちの製薬を売っていたことが明るみに出る。これからはその謝罪に迫られ、薬の販売も何社か

に分けて行われるだろう、とはモコウの弁。

意識が戻ったケイネに、思わず抱きつくモコウ。そんな二人を見つめて、レイム達は別れを告げる。

モコウ、ケイネと別れ、レイム達は光琳堂へ。無事みんなが助かってよかった、と言つサナエ。それにレイムは、

「……今回は、ありがとね」
後ろを向いてそう言った。

それを聞いたサナエとアキユウは顔を見合わせるが、「聞こえなかったからもう一回言つて下さい」とにやにやと笑つと、レイムに絡みつく。

顔を真っ赤にしたレイムが「ええい鬱陶しい！」と腕を払つと、次のスクリーンが。

フィルムと、紅葉。そしてカラスの羽に、天を指す手。

「天狗に、カメラ……」
次の世界は、文化帖だ。